

武蔵丘ハンドボールクリニック活動報告 The activity report of Musashigaoka Handball Clinic

高橋 琴美
Kotomi Takahashi

高橋 こずえ
Kozue Takahashi

Abstract

This is the activity report of Musashigaoka Handball Clinic. This clinic was done by Musashigaoka Sports Club. The purpose of this clinic is the dissemination of handball ,and regional contribution. In this clinic, it was important to communicate with the cooperation with fellow than the progress of skills. The clinic was held three times a year by changing the participant. Participants of this clinic were the elementary school children and junior high school students and parent-children. Former All Japan players and professional leaders and top players coached children. College students helped it. We were able to make a valuable opportunity to learn handball from top players for children. The future, we want to continue to provide a valuable opportunity by continuing this clinic.

Key words : Musashigaoka Handball Clinic, cooperation, communication, Musashigaoka Sports Club

I はじめに

ハンドボールは、走る、跳ぶ、投げるといった基本的な運動要素を含んだ球技で、ヨーロッパを中心に人気の高いスポーツである。しかし日本国内では競技人口が少なく、認知度も高くはない。埼玉県内でも、地区によってチーム数に大きな差があり、北部・西部地区は他の地区と比べチーム数が少ない。そのため児童・生徒がハンドボールに興味・関心を持っても学校には活動できる部がない、あるいは部の活動はしているが部員数が少なく、単独チームでの大会参加が難しいといった状況が生まれている。そこで武蔵丘スポーツクラブでは、武蔵丘短期大学の施設を利用し、スポーツイベント事業の一つとして平成24年から「武蔵丘ハンドボールクリニック」(以下、クリニック)を開催している。このクリニックは、ハンドボール競技の普及及び地域社会への貢献を目的とし、子どもたちにハンドボールに触れる機会を提供するとともに、埼玉県内に拠点を置く日本のトップチームである大崎電気ハンドボール部とそのOBに協力をお願いし、ハンドボールというスポーツを通じて思いやりの精神や努力する習慣、コミュニケーション能力の向上を図ることを目的とした

プログラムを年3回実施している。また本学学生においてはクリニックの運営に携わることでイベントの企画・運営について学ぶと同時に、補助員としてクリニックに参加し、子供たちと一緒に活動することでコミュニケーション能力を養い、ハンドボールの指導法について学ぶことを目的とした。本報告では、これまでのプログラム実施内容の報告と今後の課題について報告する。

II 平成24年度

1. 事前準備

クリニックの開催にあたり、参加対象者の設定、開催時期を検討する必要があり、西部地区で小学生から高校生まで指導している筑波大学附属坂戸高等学校の平野延行教諭に相談し、助言をいただいた。参加対象者として、埼玉県北部・西部地区ではハンドボールの認知度が低く、ハンドボールの経験がない子どもたちの参加が難しいことから、まずは県内のハンドボールチームに声をかけ、参加を募ることとなった。また施設の大きさ等を考慮し、小学生・中学生を対象とすることとした。開催時期については、対象とする参加者の大会がない時期とした。

クリニックの講師として、元日本代表キャプテンで元大崎電気ハンドボール部の東俊介氏と NTS インストラクターの山口たまき氏に協力を依頼した。東氏からは大崎電気ハンドボール部の協力について提案があり、お願いすることとなった。

クリニック当日の救急体制として、アスレティックトレーナーである田中忍氏に協力を依頼し、学生とともに対応をお願いした。また熱中症予防のため、スポーツドリンクを用意し、こまめに給水を促すとともに、涼しくした休憩室を準備した。

2. 開催時期、参加者数と講師

開催回数は年3回とし、参加者を小学生（高学年）、中学生、親子（小学生とその保護者）にすることとした。開催時期と参加対象者および人数は表1の通りである。第3回については、参加者が小学生のみ、あるいは保護者1名小学生2名以上の参加の場合は、学生が保護者役で参加した。

表1 平成24年度開催日時及び参加者

	日時	参加者	人数
第1回	8月19日(日) 10～13時	坂戸ハンドボールクラブ さいたま市ハンドボールクラブ	高学年 30名
第2回	10月13日(土) 14～17時	大妻嵐山中学校 春日部市立豊春中学校	44名
第3回	1月27日(日) 13～16時	小学生とその保護者	17組 29名

なお、各回の講師は次の通りである。

第1回：東俊介氏、東佑三選手

第2回：東俊介氏、山口たまき氏

第3回：東俊介氏、山口たまき氏

3. 内容

東氏との事前打ち合わせにより、このクリニックでは、技術・戦術的な内容は必要最小限とし、仲間とコミュニケーションをとり、協力し合うことを重視した内容で展開することとした。また各回の最後には必ずゲームを取り入れ、仲間と協力し合うことを意識させるとともに、応援ポイントを設け、試合のないチームは試合をしているチームを大きな声で応援をすることで仲間の良いプレーを認め、応援する大切さを意識させた。

クリニックは全体的に好評で、特に普段接することができない元全日本選手や現役選手から直接指導を受けられ、さらにクリニック最後の交流会でより身近に選手と接することができたことは、子どもたちにとって貴重な機会となった。また本学学生にとっても貴重な学びの機会とすることができた。反省点としては、開催時期の調整が遅れたこと、クリニックの時間が予定より長くなったことが挙げられる。これらについては来年度以降改善することとなった。



写真1 小学生クリニック



写真2 中学生クリニック



写真3 親子クリニック

Ⅲ 平成 25 年度

1. 事前準備

講師、担当で事前に打ち合わせを行い、参加者と開催回数、及び開催時期は平成 24 年度と同様とした。内容について平成 24 年度の内容から変更をするか検討した結果、小学生と親子のクリニックについては同じ内容とした。中学生のクリニックについては、よりモチベーションを高めるためにポジション別の練習を入れることで技術的な内容を取り入れることとした。

クリニック当日の救急体制については、田中氏が引き続き協力してくれることとなり、24 年度と同様に行うこととなった。

2. 開催時期、参加者数と講師

開催回数、参加者を表 2 に示した。

表 2 平成 25 年度開催日時及び参加者

	日 時	参加者	人 数
第 1 回	8月18日(日) 9～12時	坂戸ハンドボールクラブ さいたま市ハンドボールクラブ	4～6 年生 18名
第 2 回	10月27日(日) 13～16時	春日部市立豊春中学校 東京農業大学第三高等学校付属 中学校	34名
第 3 回	1月18日(土) 12～15時	小学生とその保護者	19組 25名

なお、各回の講師は次の通りである。

第 1 回：東俊介氏、東佑三選手、石川出選手

第 2 回：東俊介氏、山口たまき氏、東佑三選手、森淳選手

第 3 回：東俊介氏、東佑三選手、岩永生選手



写真 4 小学生クリニック



写真 5 中学生クリニック (GK 練習)



写真 6 親子クリニック

3. 内容

小学生と親子のクリニックでは、24 年度同様に仲間とコミュニケーションをとり、協力し合うことを重視した内容で展開した。中学生のクリニックでは、全体でウォーミングアップを 30 分程度行った後、コートプレーヤーとゴールキーパーに別れ、ポジション別の練習を行った。ポジション別の練習の後は再び一緒に練習を行い、コートプレーヤーはシュート練習を、ゴールキーパーはシュートを止めるためのセービングや位置取りの練習を行った。すべての回において、最後はゲームを行い、仲間との協力と応援の大切さを意識させた。

参加者の中には 2 年連続の参加者も多く、24 年度同様の内容で進めたことが心配であったが、特に不満の声を聞くことなく進んだ。中学生のクリニックについては、内容を一部変更し、ポジション別の練習を取り入れたところ、熱心に練習に取り組む姿が見られ、中学生にとっては新しいことに取り組むことがモチベーションを高める一つのポイントになると考えられた。

Ⅳ 今後の課題

これまでのクリニックでは、大崎電気ハンドボール部の協力により、現役選手に直接指導してもらえる貴重な機会として、参加者から大変好評である。そして、専門的な指導ができる山口氏の協力により、特に中学生のクリニックではゴールキーパーのための練習の機会を設けることができた。ゴールキーパーの指導は難しく、中学校の指導者からも非常に喜ばれたため、今後もこの内容を継続していきたいと考えている。またこのクリニックの大きな特徴としては、仲間との協力、コミュニケーション能力を養うということを重視していることと、他ではあまり開催されていない親子クリニックを開催していることにある。普段は子どもたちだけで行っているハンドボールを親子で一緒に行うことで、普段とは違った形でお互いに接することができるため、参加者から非常に好評であった。技術指導中心の講習会はいろいろところで開催されているが、仲間との協力やコミュニケーション能力を養うことを中心とした講習会はまだ少ないため、参加者からの要望などを取り入れつつ、今後もこの2つをクリニックの特徴として継続させていきたいと考えている。

全体的には大きな問題もなく、スムーズに開催できているが、今後より発展、継続していくためには検討すべき課題がある。まず一つ目の課題としては広報及び参加者募集の方法が挙げられる。このクリニックはハンドボールの認知度の低さから、まず小学生ハンドボールチームへ参加を呼びかけることから始めたが、参加者募集の方法がハンドボールチームへの案内が中心になるとハンドボール未経験者の参加はなかなか難しく、ハンドボールを経験したことがない子どもたちにハンドボールを行う機会を作るといった目的はあまり達成できていない。今後は、広報の方法、参加募集の方法なども含め、経験のある子どもたちの参加だけでなく、経験のない子どもたちの参加をどれだけ増やせるかも考えていく必要がある。また経験のない子どもたちが参加し、ハンドボールを楽しんだとしても、その後の活動場所がないという意見も一部の保護者の方から寄せられている。よってただ参加者を増やすことだけではなく、その後も継続してハンドボールができる環境を作っていくことも、今後の発展には必要である

と考えられる。

二つ目の課題として開催時期がある。開催時期については、当初予定では年3回で計画していたが、1月の開催は寒い時期で参加者が集まりにくいこと、大崎電気ハンドボール部の試合期と重なり日程調整が難しいこと、本学学生の試験期間が重なることなどから、今後は開催時期を検討する必要がある。大崎電気ハンドボール部の試合期以外で開催できるのは6月～10月の期間となるが、その期間は学生のリーグ戦も重なり日程調整が難しいため、日程調整だけではなく開催回数自体も検討する必要がある。

このクリニックは、本学学生にとっても非常に貴重な学びとなっている。講師や現役選手と一緒に子どもたちの指導を行うことでコミュニケーション能力を養い、指導法を学ぶだけではなく、クリニックの準備・運営に携わることでスムーズに進行するために、今何をすべきか自ら考えて行動することは、これからの社会に出ていく際にもとても大切なこととなる。参加者に喜んでもらえるだけではなく、このような学びの機会を本学学生に提供していくために、今後も改善を続けながら、武蔵丘ハンドボールクリニックを継続させていきたいと考えている。

Ⅵ 謝辞

この武蔵丘ハンドボールクリニック開催にあたり、東俊介氏、山口たまき氏、大崎電気ハンドボール部、田中忍氏、平野延行氏、及びご協力いただいた皆様に感謝いたします。